

縁を丸い円で結ぶ”ひとつなぎ”の マルシェイベントとめまる

宮城県登米市 とめまる実行委員会 ユルヤカニカワルマチ

いちにちあそべるてづくりマルシェ
とめまる

いちにちあそべるてづくりマルシェ「とめまる」は、当時地域おこし協力隊だった代表のアイデアから始まりました。登米市の「楽しい」をまとめるマルシェという意味を込めて、「とめまる」と名付けました。

「コロナ禍で元気を失った地域に笑顔を」。そんな想いから企画しましたが、当初は「よそ者が勝手にやっている」という声が聞こえてきたことを今でも覚えています。

人口約7万4000人、高齢化率36・9%のこの地域は、新しいことに少し慎重で、「やりたいこと」を胸に秘めている人がたくさんいます。そして、その人たちが繋がることで、



高校生が自分たちで考えた企画

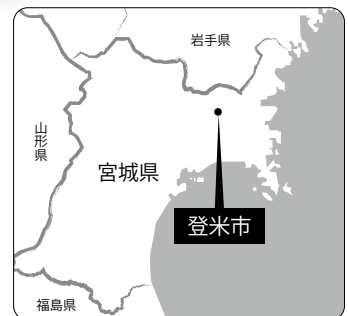
天候すら味方するほど大きな力になることを証明してきたのが、この「とめまる」です。官民、教育、福祉の連携を自分たちで考えつつ、その中心に「こどもたちの笑顔」を据えたこのイベントは、これからも毎年進化し続けます。

初めての開催

イベント開催の経験がなかった代表の「登米市を笑顔にしたい」という想いがとめまるの根幹です。

全てが初めてだらけの開催は、コロナが落ち着きを見せた時期とも重なり、来場者は約4500人にのびりました。

会場には飲食・クラフトの出店ブースが



並び、11団体によるステージ発表も行われました。さらに、高校生が企画した「100人100アート」では、来場者と一緒に大きなキャンバスへ絵や文字を描く参加型アートを実施。独自の社会教育の仕組みを活かしながら、学生たちが中心となって半年かけて準備を進めました。

若者たちの熱意に心を動かされた多くの来場者がこの企画に参加し、大型キャンバスにはたくさんさんの想いが重なり、当日中に大きなアート作品が完成しました。

初の開催は、連携していく基盤が見えた、非常に大きな意味を持つ1回目となりました。

土台づくりの2回目

2回目の開催では、実働メンバーに「地域で夢を持った」仲間が増えたことが大きな特徴でした。

e-sports、プラモデル体験など、こどもたちが夢中になり、幅広い年代が楽しめるコンテンツが新たに加まりました。また、子育て支援に関心のあるメンバーの発案で、「親子が安心して過ごせる空間」をつくるため、屋外イベントでは珍しい授乳室・おむつ替えスペース・託児機能付きのキッズスペースを整備しました。これにより、「家族

連れの安心と楽しさ」という現在のコンセプトが確立され、他イベントとの差別化にもつながっています。

新しいコンテンツを主導したメンバーの周りには同じ想いを持つ仲間が多く、本イベントは「夢が実現できる場所」というイメージを地域に広げることができました。

催事内容は初回をベースにしつつ、高校生が考案した3つの企画も実施しました。会場で出たゴミを使ったエコアート企画、屋外で思い切り水鉄砲を撃ち合う企画、キッズチンカーと連携して販売促進ツールを開発する企画など、学生主体の取り組みが会場をさらに盛り上げました。



kids見守りフィールドの様子

2回目の開催は、官民・教育・福祉の連携をさらに推し進め、地域の仲間が大幅に増えた節目となりました。

満を持しての3回目の開催

3回目の”とめまる”は、これまで「よそ者がやっているイベント」と見られていた時期を経て、ついに地域からの応援と協力を得て開催できる段階にまで成長しました。

当日のボランティアは前回よりも増え、市内企業から頑張る高校生への差し入れ、私有地の借用、備品の貸し出しなど、様々な形で支援をいただきました。

来場者の中には地元企業の社長やイベント関係者など、地域のキーパーソンが訪れ、「頑張ってほしい」という励ましの声や、「どう運用しているのか」といった質問、高校生の活動を見て「地域にこんなに頑張るこどもたちがいたのか」と驚きと関心を寄せる姿が見られました。

そして何より、来場者や出店者、ボランティアの方々から「開催してくれてありがとう」「来年も楽しみにしている」という言葉を数多くいただきました。

来場者数は延べ2万3000人。3回目にしてようやく、市民の皆さんから認知されたと実感できる開催となりました。

期待と応援の4回目

4回目の開催は、2026年5月23日に開催しました。地域共創型フェスとして多くの期待と応援を受け、20代の若者を含む運営体制のもと、小中高校生・大学生の挑戦フィールド、キッズスペース、出店、ステージなど、合計97のコンテンツを展開しました。

登米市内外からは延べ30000人が来場し、他地域の団体による視察も行われました。参加者からは「若者がこんなに活きた。活きているイベントは初めて」「若者が頑張っているなら大人も負けていけない」と



小学生のこども店長

いった声が寄せられ、世代を超えた刺激と共感が生まれました。

また、エコステーションの改革にも取り組み、近隣自治体の生ごみリサイクルを導入。来場者に分別協力をお願いしながら「ありがとう」を伝えることで、分別の大切さを改めて感じてもらう機会となりました。

過去最多の来場者数に加え、これまでで最も大きな地域からの応援を実感できるものとなり、そして、未来へつながる新たな種をしつかりと見つけることができた開催となりました。

結び

「まちづくりはひとつづくり」という言葉があります。しかし、まちは一朝一夕では変えられません。けれど、身近な人、興味を持ってくれた人、やってみたかったことを抱えていた人と一緒に、心を動かすことはできる。そして、その輪を少しずつ広げていくことはできると確信しています。

そうした大人たちの姿を見た若者は、「この地域でもやりたいことが叶う」と感じられることで、挑戦ができるまちになる。これが、今の私たちの夢です。

1人ではできないことも、仲間が増えれば実現できることが増える。ひとつの縁が



当日の会場の様子

大きくつながり、円となり、力へと変わり、さらに多くの人を魅了していく。この流れこそが本質的な「まちづくり」であり、地域課題の解決につながると私たちは信じています。

私たちは民間主導で、この「とめまる」を通じてその姿を体現していきたい。「ひとつづくり」ではなく、「ひとつなぎ」を軸に、「とめまる」はこれからも進化し続けてまいります。

（とめまる実行委員会 ユルヤカニカワルマチ
実行委員長 志田敏典）